

ロールシャッハテストによる不安の研究

— 特に不安の顕在化と潜在化を

めぐる精神力動について —

千葉大学大学院医学研究科内科系神経精神医学（主任 松本 胖教授）

吉 川 武 彦
TAKEHIKO KIKKAWA

（昭和 40 年 12 月 21 日受付）

I. はじめに

臨床精神医学における不安の問題は、常態心理と病態心理の連続性⁽³¹⁾を考えるうえで、その接触点として重要性をもち、更に精神療法的観点から、臨床における不安の解明は極めて重要な意味をもっている。すなわち、精神療法的過程で、不安は最も共感的であり、病者との交流は、いわば病者の不安の理解から始まるともいえる。

不安の研究は、歴史的に言えば、Spinoza, B., Pascal, B. 以来まず哲学の命題であつた。不安を人間の自由への志向性によつたとした Kierkegaard, S. 以後、正常の不安と神経症的不安とが、例えば、Freud, S.⁽¹¹⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾の精神療法的実践を通して、臨床家にとつて解明を迫られる問題となつた⁽²⁸⁾。すなわち、神経症者において、症状は不安に対する防衛の産物であり、治療者は、その不安に共感することによつて、初めて治療的な交流をもつことができる。このような不安が、正常な人間と全く断絶した世界にあるとされる精神分裂病者において、Sullivan, H. S.⁽⁵¹⁾や Fromm-Reichmann, F.⁽¹⁷⁾等の研究により、病者の不安への共感を通じて、治療的交流の端緒がえられることが明らかとなつた。すなわち、精神分裂病者の場合、治療者は病者の不安に直接関与し、自からの不安を受け入れるところから治療が始まるとされる⁽¹⁹⁾⁽³⁸⁾。

自我心理学的見地からいえば⁽¹⁰⁾⁽¹⁵⁾⁽³³⁾、不安は自我の発達過程における精神内界の衝動、葛藤に起源をもち、正常な自我の発達には、このような不安を防衛し、適応していくことであるといえる。すなわち、精神生活を、衝動、防衛、適応という側面からみると、不安は、その中に常に介在し、人間の自

由への志向性に伴つて、極めて重要な役割を演じている。

このような不安が、いかに病者を把え、症状を顕在させるかについて、その質と内容あるいはそのパーソナリティと関連する過程について、客観的理解を深めることは、特に神経症者の診断と治療に極めて重要である。更に、前述した常態心理と病態心理の連続性、あるいは、その病態化への過程を理解するてがかりを与えるものと考えられる。

不安を精神生理学的現象として把え、実験的に不安状況を作り、生理学的に検索する研究も行なわれているが⁽³⁶⁾、著者は、神経症者、境界例、精神分裂病者への精神療法的接近により、その治療過程に出没する不安を、精神病理学、ないし、精神力動学的見地から理解し、同時に行なつた心理テスト、特にロールシャッハテストの結果の検討を行ない、不安の病態の追求を試みている。

日常の臨床場面で、神経症者や境界例、精神分裂病者において、その病態として出現する不安の様相は、治療者にとつて症状として端的に理解しうるものから、より無気味な「むきだしの戦慄すべきもの」(Binswanger, L.)まで含まれ、治療初期から治療者に対決を迫り、治療者をも不安に陥れようとし、治療過程そのものを脅かす場合もある。一方、治療開始当初において、むしろ不安が潜在化し、治療過程を通して、精神内界に強く抑圧されていたものが、外には攻撃的となつて治療者を不安に追い込むこともしばしば体験される。すなわち、このような状況では、不安は、例えば身体症状に転換して現われ、病者の精神的安定は抑圧によつて防衛されているといえる。しかしながら、治療初期に行なわれたロールシャッハテストの検討により、潜在化し

た不安が内的葛藤として表現されていることが見出される場合が多く、治療初期における身体症状は、むしろ不安の表現として理解すべきであると考えられる。

著者は、このような治療的体験を通して、不安を露わにするものと不安を潜在化させ、例えば身体症状として転換しているものとのロールシャッハテスト結果をあらためて整理し、検討する必要を認め、更に不安の病態化の過程をも併せて追求し、境界例や精神分裂病者における不安の変容が、無気味な内容をもつに至る内的精神力動と、客観的データとしてのロールシャッハテスト・プロトコルの検討により解明しようと試みた。

ロールシャッハテストは1対1の場合において、一定のInstructionを与え、amorphus, ambiguousなインクプロットに対し連想をめぐらすように指示をする。これは精神療法過程において、治療者と病者が1対1で対し、自由連想を行なわせるのに比せられる⁽²⁾⁽³⁷⁾⁽⁵²⁾。精神療法治療場面では、病者はより退行的になり得る場面構造を有し、同時に自我は、その適応性を維持せんとし葛藤状況に陥り、ここに不安の増大をみる。これらの心理的なプロセスを力動的に把え、解釈を行なうことが、精神療法過程では常に行なわれているが、ロールシャッハテスト施行場面も、極めてこの状況に類似しているといえる。したがって、精神療法における不安の問題の力動的な解釈と同様に、ロールシャッハテストにあつても、不安を動的に把え、解釈し、精神療法過程に起る不安を予見し、その解明の補助とすることが必要である。

従来より行なわれてきたロールシャッハテストによる不安の研究は、Rorschach, H.⁽⁴⁴⁾自身が体験型と不安の関係を述べたのに続き、Klopfer, B.⁽²¹⁾はFK, KF, K, 等を中心に、Beck, S. J. はV, Yを中心にして陰影反応が不安の指標たり得るとした。Piotrowski, Z.A.⁽⁴⁰⁾は更に陰影ショックも不安の指標であると考えた。Eichler, R. M. はこれらの研究をまとめて15項目をあげ、それらの増減は不安との関係が密であることを示した。村上⁽³²⁾らはDevosの情緒象徴法を取り入れ、感情カテゴリーを用いて不安の研究を行なつた。

ロールシャッハテストのテスト場面構造と、精神療法場面構造との対比は小此木⁽³⁷⁾⁽⁵²⁾等によつて詳細になされている。著者も、精神療法過程が多回の接触の場であるのに対し、ロールシャッハテスト

のテスト過程は1回のであるが、そこに生起する心理的なプロセスは極めて類似し、多回の接触の場としての精神療法過程での多くのものが投影され、ロールシャッハテスト結果に現われてくると考えている。このような観点からロールシャッハテストを把え、従来から行なわれてきた陰影反応と不安の関係を追求するに止らず、不安の問題を精神療法的に再検討し、不安の顕在化と潜在化の精神力動をめぐり、特にロールシャッハテストの無生物運動反応と不安の関係を検索し、運動反応全体との関連を検討した。

m に対しては今日まであまり多くの研究がなされておらず、その意味はいまだ不明確なものとされているが、現在のところはKlopfer⁽²¹⁾⁽²²⁾, Piotrowski⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾等により“内的葛藤の存在、またはその認知”、“自己観察傾向、空想的傾向の存在”を示すものとされている。

著者は、以上の精神療法治療体験と、これらの理論を参照し、神経症者を精神療法開始前後に不安を顕在させていたものと、不安を意識から分離し、潜在化させていたものに分け、正常者、精神分裂病者、離人症者、境界例を対照とし、不安の出没をめぐる精神力動に関して考察を試みた。

II. 資 料

昭和33年より昭和40年に至る7年間に、主として千葉大学医学部神経科外来、及び入院患者より得られたロールシャッハテストのうち、経過を十分に観察し得た163例を対象とした。この中より神経症者（以後神経症群、またはNR-Gとする）72例を選び、治療開始当初に不安を露わにするもの（不安顕在群またはMA-Gとする）26例、不安を潜在化しているもの（不安潜在群、またはLA-Gとする）46例に分けた。

対照群として、正常群（N-Gとする）28例、精神分裂病群（S-Gとする）39例を選んだ。更に、離人症群（D-G）18例、境界例（B-G）20例、及び初期分裂病群（SA-G）8例を選んだ。

これら各群の性別、平均年齢、教育年数（学歴に代える）の平均等は表1にまとめた。

なお、ロールシャッハテスト施行時期は全例につき、治療開始前後とし、数回にわたり施行したものは初回のもので採用した。

表 1. 対象の性別・平均年齢・教育年数（平均）

	N-G	NR-G		S-G	D-G	B-G	SA-G
		MA-G	LA-G				
N	28	26	46	39	18	20	8
Sex	♂	18	15	11	7	8	3
	♀	10	11	28	11	12	5
Age aver.	24.8	27.2	27.8	31.5	19.5	22.4	21.6
Educ. aver.	14.1	11.3	12.2	9.3	12.3	10.8	12.3

表 2. 各 因 子 の 平 均 値 一 覧

	N-G	NR-G		S-G	備 考
		MA-G	LA-G		
R	25.54	21.73	23.48	17.10	※※※※※
Rej	0.29	0.23	0.87	1.23	※※※※※
T / R ₁	27.23	25.00	26.39	18.56	
T / R ₁ -n	25.79	23.26	24.54	16.78	
T / R ₁ -c	28.57	29.31	27.94	20.28	
W	8.86	9.81	11.87	7.90	
D	12.64	9.46	9.09	7.33	
Dd	3.29	2.23	2.16	1.54	
S	0.75	0.19	0.37	0.33	
M	4.43	2.37	3.52	1.28	※※※※※
FM	4.30	3.25	4.24	2.96	△
m	1.62	1.73	2.35	1.17	※※※※※
m-m	0.87	0.96	1.48	0.64	
add-m	1.64	1.54	1.74	1.05	
k	0.20	0.69	0.48	0.25	※
K	0.16	0.21	0.36	0.09	※
FK	0.91	0.69	0.86	0.25	※※
F	9.59	10.15	10.27	8.66	
c	0.16	0.17	0.15	0.05	△
Fc	1.38	0.73	0.73	0.51	
C'	1.20	1.13	1.24	0.87	△
FC	3.63	1.31	1.77	1.45	
CF	1.21	1.46	1.78	0.80	
C	0.05	0.17	0.12	0.05	
spC	0.14	0.10	0.15	0.15	
total H	5.64	3.62	4.76	2.36	※※※
H	2.82	2.04	2.33	1.08	※※※※※
(H)	1.18	0.77	1.31	0.25	※※※※※
Hd	1.32	0.65	0.81	0.69	
(Hd)	0.32	0.15	0.33	0.33	
total A	12.07	10.04	9.65	8.04	
A	9.11	7.19	7.52	6.75	
(A)	0.82	0.85	0.78	0.15	

Ad	2.04	1.88	0.96	0.13	SA-G: 0.75
(Ad)	0.11	0.12	0.39	0	
Aobj	0.50	0.46	0.43	0.13	
Obj	1.68	1.38	1.43	1.26	
pl	1.39	1.31	1.33	1.13	
At	1.25	1.85	1.50	1.74	
Sex	0.18	0.58	0.17	0.05	
Anal	0	0.04	0.02	0.05	
Blood	0.11	0.23	0.26	0.18	
Fire	0.29	0.23	0.41	0.21	
Cloud	0.04	0.15	0.04	0.15	
Smoke	0.07	0.08	0	0	
Lds	0.61	0.35	0.57	0.23	
Abst	0.15	0.23	0.30	0.13	
Map	0.29	0.15	0.20	0.26	
Na	0.11	0.15	0.24	0.18	
Food	0.21	0.12	1.09	0.08	
Art	0.32	0.23	0.52	0.33	
Arch	0.15	0.12	0.46	0.10	
Expl	0.21	0.08	0.17	0.05	
Σ C	3.13	2.27	2.80	1.62	
M	4.54	2.37	3.52	1.28	
Fc+c+C'	2.73	2.04	2.12	1.46	SA-G: 17.30
FM+m	5.95	4.98	6.55	4.13	
VIII+IX+X/R	33.33	29.88	31.26	31.40	
F	9.59	10.15	10.27	8.66	
FK+Fc	2.29	1.40	1.59	0.77	
FC	3.63	1.31	1.77	1.45	
CF+C	1.27	1.64	1.90	0.85	
F% -1	35.04	48.08	40.83	50.15	
F% -2	92.39	90.35	91.37	91.70	
F+% -1	76.57	54.96	64.70	47.90	
F+% -2	73.07	60.69	69.20	56.55	
A %	47.68	45.81	45.30	49.15	
At %	5.07	9.88	7.65	9.11	
C. R.	6.43	6.15	6.13	5.70	
P	5.82	4.58	4.64	3.89	
Shading %	12.11	13.35	9.89	8.10	
Δ %	3.07	2.50	3.29	2.89	
BRS	$\oplus$ 35.71	$\ominus$ 13.69	$\ominus$ 10.78	$\ominus$ 22.95	
RSS	$\oplus$ 36.99	$\oplus$ 11.62	$\oplus$ 17.62	$\ominus$ 3.09	
Total	28	26	46	39	

註: 備考欄のうち

- 1) ※※※※※..... P<0.005 で各群間に有意差あり
- 2) ※※※※※..... P<0.01 〃
- 3) ※※※..... P<0.025 〃
- 4) ※※..... P<0.05 〃
- 5) ※..... P<0.1 〃
- 6) $\triangle$ P>0.1 で有意差なし

表 3. Location について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
W %	34.7	45.2	50.5	46.2
D %	49.5	43.6	38.7	42.8
D d %	12.9	10.2	9.2	9.0
S %	2.9	0.9	1.6	2.0
Total	100.0	100.0	100.0	100.0

表 5. Blood, Fire, Explosion について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
Blood	0.11	0.23	0.26	0.18
Fire	0.29	0.23	0.41	0.21
Expl.	0.21	0.08	0.17	0.05

表 4. 全体反応対部分反応について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
W>D	12	16	27	22
W=D	1	1	2	3
W<D	15	9	17	14
Total	28	26	46	39

表 6. 運動反応について

	N-G	NR-G		S-G	備 考
		MA-G	LA-G		
M	4.43	2.37	3.52	1.28	※※※※※
FM	4.30	3.25	4.24	2.96	△
m	1.62	1.73	2.35	1.17	
M+FM+m	10.35	7.35	10.11	5.41	

註： 備考欄のうち

1) ※※※※※… P<0.005 で各群間に有意差あり

2) △…………… P>0.1 で有意差なし

表 7. 総決定因数に対する運動反応の比について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
M+FM+m/T. D.	37.78 %	30.37 %	36.09 %	29.15 %
M/T. D.	15.27 %	9.78 %	12.57 %	6.91 %
FM/T. D.	14.84 %	13.43 %	15.12 %	15.94 %
m/T. D.	5.67 %	7.16 %	8.40 %	6.28 %

註： 1) T. D.=Total Determinants

註： 2) M+FM+m/T. D. で D-G……33.80

B-G……34.78

SA-G……30.19 である

表 8. 総運動反応に対する運動反応各因子の比について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
M/T. M. R.	42.69 %	32.20 %	34.82 %	23.72 %
FM/T. M. R.	41.48 %	44.24 %	41.97 %	54.71 %
m/T. M. R.	15.83 %	23.56 %	23.21 %	21.57 %
Total	100.00 %	100.00 %	100.00 %	100.00 %

註： T. M. R.=Total Movement Responses

表9. m について

	N-G	NR-G		S-G	備 考
		MA-G	LA-G		
m	1.62	1.73	2.35	1.17	註 1)
m-m	0.87	0.96	1.48	0.64	註 2)
add-m	1.64	1.54	1.74	1.05	註 3)
m/T.D.	5.67 %	7.16 %	8.40 %	6.28 %	註 4)
m/T. M. R.	15.83 %	23.56 %	23.21 %	21.57 %	註 5)

- 註 1) $P < 0.005$ で各群間に有意差あり
 2) 主反応としての m
 3) 附加反応としての m
 4) T. D.=Total Determinants
 5) T. M. R.=Total Movement Responses

表10. m の下位分類について

	N-G		NR-G				S-G		備 考
			MA-G		LA-G				
Total	46	100 %	45	100 %	108	100 %	45.5	100 %	F-test
m ₁	13	28.2%	7.5	16.7%	37	34.2%	13	28.5%	※※
m ₂	1.5	3.3%	0	0 %	4	3.7%	4	8.8%	△
m ₃	9.5	20.5%	5.5	12.2%	8.5	7.9%	5	11.0%	△
m ₄	10	21.8%	9.5	21.1%	17.5	16.2%	8.5	18.7%	△
m ₅	12	26.2%	22.5	50.0%	41	38.0%	15	33.0%	※※※※
X ² -test		△		※※※※		※※※※		※※※※	

- 註 1) ※※※※…………… $P < 0.01$ で有意差あり
 ※※…………… $P < 0.05$ “
 △…………… $P > 0.1$ で有意差なし

表11. 陰影反応について

	N-G	NR-G		S-G
		MA-G	LA-G	
T. Sh. R./T. D	13.80	14.95	13.64	11.12
T. Sh. R./N	4.01	3.62	3.82	2.06

- 註 1) T. Sh. R.=Total Shading Responses
 $=k+K+FK+c+Fc+C'$
 2) T. D. =Total Determinants

III. 資料の整理と解釈 (1)

以下、主として表2の資料の整理と解釈を行なうこととする。

総反応数 R は正常群 (N-G) に比し不安顕在群 (MA-G), 不安潜在群 (LA-G) 共にやや低く, 精

神分裂病群 (S-G) は更に低い。これは従来より神経症者の反応数は低下するといわれてきたことと一致し, LA-G の方にその低下率が低いことは, 他の所見と併せて考えると意味あるものとなる。

反応拒絶カード数 Rej は対照の S-G に高いが, 神経症群 (NR-G) の中では $MA-G < LA-G$ で, その差も著しい。すなわち, 反応数 R は LA-G に多く, N-G に近い位置にありながら, 反応拒否 Rej は LA-G に高く, MA-G の 3.5 倍強であり, 適応的であろうとしながらも, 警戒的, 抑制的になりやすく, 柔軟性に乏しく, 硬化した態度になりやすいことを示している。

無彩色カードの初発反応時間の平均 T/R_1-n で $MA-G < LA-G$ であるにもかかわらず, 有彩色カード初発反応時間平均 T/R_1-C では明らかに $MA-G > LA-G$ であることから, LA-G が濃淡へのとらわ

れを、MA-G が色彩へのとらわれを示しており、MA-G, LA-G に力動的なニュアンスの相違があることを示唆している。

反応領域間の比 $W:D:Dd:S$ に関しては、平均値の比較からは NR-G の W 優位が指摘される。その程度は LA-G に強く、ここにもやや具体的な現実把握を行なう際に、全体にこだわる傾向の強さを感じられる。この点を、より明確にする為に表3、表4を作成した。

LA-G が MA-G に比して高い S 値をもつことは、S についていわれる“個性への自信” (Piotrowski⁽⁴⁰⁾), “自身への抵抗” (Rapaport⁽⁴²⁾), すなわち内的葛藤の存在と無縁のものではない。

運動反応については項をあらためて詳細に検討を試みる予定である。ここでは、N-G で $M > FM$ であるのに対し、NR-G では $M < FM$ であること、及び、m が各群を通じて変動が激しく ($P < 0.005$ で有意差あり)、特に、LA-G に高いことを指摘するに止める。

k, K, FK, c, Fc 等の陰影反応及び C' の黒白反応は、Rorschach 以来^{(5) (6) (7) (20) (21) (40) (42) (44) (47) (49)} 不安との関連が追求されてきた。k, K, FK 共に程度の差こそあれ、各群間に有意差がみられ、Fc にも同様に有意差がみられる。c は発現頻度も低く、決定的なことがいえないが、 C' が有意な差を生じなかつたのはやや意外な印象をうけた。

NR-G には k が高く、なかでも MA-G に高い。K は仮説的には不安の直接的表現ともいわれているが⁽²⁰⁾、LA-G に高く、MA-G は、N-G にくらべれば高いが、LA-G より低い。

FK は感受性に富み、繊細な感情をもつものに現われるとされているが、同時に自己を客観化しようとする傾向をもつともいわれている。したがって、LA-G は、K の多発傾向と相まって、不安そのものは決して少なくないにもかかわらず、内的統御による不安の解消をはかり、自己を客観化しようとする努力を失っていないともいえる。

色彩反応 FC, CF, C では、まず N-G に対して NR-G が全体に著明な減少をみせていること、特に FC が MA-G において減少していることは、 $T/R_1 - c$ で MA-G が高く、色彩へのとらわれと解釈したと併せて考えると興味深い。色彩反応は各因子について独立にとりあつかわれ、解釈されることもあるが、多くは $FC: CF+C$ の形で解釈される。 $FC: CF+C$ では、N-G で $FC > CF+C$ 、NR-G で

$FC < CF+C$ であるが、MA-G の方が LA-G に比しその差が大きく、LA-G がより外的統御に成功しているといえる。これは、色彩反応統計で LA-G が N-G と MA-G との中間に位置することからみても、外的刺激に対する反応性が高く、更にそれを統合して表現しようとする能力が、MA-G に比し、より高度に保たれていると考える。

なお $FC+2CF+3C/2$ として表わされる ΣC については、M との関係から体験型とよばれているが、これに関しては後述する。

反応内容では、total H に関して、N-G, MA-G, LA-G, S-G 間に有意の差があり、H が他者に対する関心や、感受性を反映する (片口⁽²⁰⁾) と考えられているところから、 $N-G > LA-G > MA-G > S-G$ というつながり方は示唆的である。すなわち、LA-G では、後述のごとく問題を内蔵しつつも、なお他者への関心をもち得るということでもある。

すなわち、total H は、H, (H), Hd, (Hd) に細分化されるが、H においては、対人共感性が素直に保たれているといつてよく、(H) では、その方向がやや歪曲され、現実的な形でなく、或いは空想に逃避しようとする傾向を示すともいえる^{(20) (57)}。すなわち、自からの世界に閉じこもりがちであるともいえる。この観点から、MA-G と LA-G とを対比すると、全く明らかな差があり、total H で示された他者に対する関心や対人共感性は、ある程度保たれているとはいえ、LA-G では不安定で、その方向はやや歪曲され、非現実的、ないし空想的傾向を示しているともいえる。

動物反応 A に対しては、A % の形で解釈される場合が多い。A はその人の生活の原型的な役割、衝動性、幼児性、空想性に関係しているとされ^{(20) (41)}、不安の指標にもされることが多い。しかし、今回の結果からは、A が不安の指標たり得るとはいえない。

(A) は、より直接的な現実回避の傾向、すなわち、(H) に比して、より直接的、衝動的なレベルでの現実回避の傾向を示すと考えられる。(A) は MA-G に多く、LA-G に (H) が優ることと対比して考えるべきである。すなわち、(H) 的な現実回避は、適応の面からは、(A) 的な現実回避に比し高いレベルにあるともいえるし、また (A) は、より退行した形での防衛、適応をはかつていているといえる。

Aobj, Obj, Pl に関しては著明な差はみられないが、わずかに S-G において、Aobj が低いといえ

る。これは主として“毛皮”としての Aobj が, Fc 反応と結びついて生じることが多く, Fc には繊細な情緒性が要求されるところから, S-G には Fc 発現が低く, したがって Aobj の反応が少いといえるかもしれない。

解剖反応 At は, A と同様に At % の形で解釈される。MA-G は他に比して高く, N-G の約2倍, LA-G とも有意な差がある。NR-G 全体として N-G の1.7倍あり, 神経症者のロールシャッハテストに At の上昇がみられる, という定説を裏づけた。また MA-G と LA-G とに有意な差が生じたことは意味深い。すなわち, At 反応は劣等感の補償, 一般的な不安, 自己身体への意識の固着等が意味づけられているが, N-G に比し, NR-G に At の多いことは, これらの意味づけを全般的に満たしており, 特に MA-G と LA-G との対比からは, 一般的な不安のたかまりが, この差を生じせしめたといつてよい。

これに関連して, Sex, Anal の反応が MA-G に多いことも理解される。Sex 反応を生じるメカニズムには, 防衛の働きが強く関与する。内的衝動性に対する防衛の弱体化が Sex 反応を生じるとすれば, MA-G の不安の顕在化は, 内的不安に対する防衛の弱体化とも考えられるところから, この両者は共通の基盤をもつものといえる。すなわち, Sex 反応の出現頻度は, 内的不安の顕在化と表裏をなすもので, MA-G より精神分裂病者, 特に初期分裂病者 (SA-G) において重要であると考えられる。

Blood, Fire, Explosion 等は, 色彩反応との関連, 特に CF 反応との関連において解釈される必要がある。すなわち, 自己の外的統御の欠如と, Blood, Fire の内包する攻撃性, 衝動性との結びつきは, LA-G において, その外的統御の破綻の可能性を示唆している (表5)。

また, Cloud, Smoke 等の不定形な内容をもつ反応が MA-G に多いことは, 不安の直接的な表現として, これを解釈してよいと考える。従来, Cloud, Smoke 等の内容をはじめとする各種の反応には, 定まつた解釈や意味づけがなされていない。これらは出現頻度も低く, その解釈に当つても, 細かい理論づけがなされにくいこともあつたが, MA-G, LA-G という, 表面的な, 症候的な不安の存否による分類において, 差を生じたことは, 一応上述の如く, 不安の直接的表現として, Cloud, Smoke を解釈することが可能であると考えられる。

他の内容に対しては, 著明な差を認めないことから, 解釈をひかえたい。

つぎに, 各因子間の相互関係を重視したスコアリングから特徴的な点を述べる。

体験型では, N-G, MA-G, LA-G を通じて, $\Sigma C < M$ で, いわゆる内向型に属するが, そのあり方には, 各群間にややニュアンスを異にするといえよう。

MA-G では, 一応内向型のパターンをとりながらも共貧型に近く, 色彩反応を通しての感情表現の制限, 人間的交流, 想像力共にやや問題があるようである。LA-G では, MA-G に比し, なお一層高い人間的交流の水準と, 感情表現が保たれていることを示している。

$Fc + c + C' : FM + m$ は, LA-G が, MA-G に比し, この差が著明で, $FM + m$ 優位である。本来 $Fc + c + C' : FM + m$ は $\Sigma C : M$ の裏づけとして理論づけられ, 解釈されてきたが, FM のもつ人格的な未熟さの表現と, m のもつ衝動性のたかまりとが相まつて, 原型的な, あるいは潜在的な力の投影がなされている, と考えたい。したがって, LA-G にこの比のひらきが大きいことは, この潜在力, ときには, これが原動力となり飛躍への足がかりともなり, また, ときには自己破壊的に作用するかもしれない潜在力として, 奥深く内蔵されているといつてよい。

VIII+IX+X/R では特記すべきものはない。

F: FK+Fc は表面的な人格統制, 情緒統制を問題にしているが, MA-G, LA-G 共に, N-G に比し, その柔軟性が失われ, 固定化しつつあることが示されている。S-G における極端な FK+Fc の減少は, 情緒統制の欠如と, 人格統制の崩壊を示し, 疎通性の困難さを示している。

FC: CF+C は前述したように, $FC > CF + C$ の関係が N-G にみられて望ましい関係にあり, MA-G, LA-G は共に $FC < CF + C$ で, NR-G が外的統制に失敗していることを示している。

F%-1 は, N-G, NR-G, S-G の順に増加し, 思考の平板化, 想像力の低下, 疎通性の減少の道程を示唆している。FC: CF+C との関連から, MA-G は感情面での安定に欠け, 主観的な歪曲に走りやすいことを示している。

しかし F も形態面からの考慮が充分になされるべきで, これは F+% として表わされる。F+% -2, すなわち R+% (片口⁽¹⁸⁾⁽²⁰⁾) は, N-G, LA-G,

MA-G, S-G の順となる。LA-G が比較的高い $F+\%$ を示すことは、他因子とも関連して、LA-G が MA-G に比し、より適応的であるといえる。

A% は、従来は不安、抑うつ感情に伴ない上昇すると考えられてきたが、今回の結果からは、これが正当であるとはいえない。しかし、MA-G, LA-G がほぼ同じ値をとつたことは、反面、不安、緊張の度合が表面的でなく、むしろその根底においては同様に強く存在するともいえる。

これに反し、At% は NR-G に高く、特に MA-G に高い。これも前述の如く、劣等感の補償、心気の傾向と共に一般的な不安等の存在が解釈されており、この意味から、MA-G と LA-G の対比上 At% が一般的な不安の投影としての示標たり得るといえるかもしれない。

しかし S-G にも At% が高く、これだけでは決定的なことがいえないが、S-G の At 出現のダイナミックスは、NR-G のそれとはやや異なるかもしれない。

Content Range (C. R.) は N-G が、MA-G, LA-G 等に比しやや高いが、あまり差がない。S-G は更に低い。C. R. は思考内容の多様性と関係づけられているから、NR-G にやや低く、S-G に低いのは予想された。

P は常識性、協調性と共に、適応の面からも解釈される必要がある。N-G > LA-G > MA-G > S-G という対比をもつことは、他因子にも同様な対比が起り得たことを併せ、適応の面から特に注目される必要がある。

Shading % は MA-G に高く、これは従来から陰影反応が、不安の存在に関係する、と解釈されてきたものと一致する。

4% は LA-G にやや高い。しかし、N-G, MA-G, LA-G は共に 5% 以下であり、この間の差はあまり強調すべきものではないと考える。LA-G に 4% が高いのは、不安、緊張が内在化され、現実と接触する際に、一層の緊張感を体験し、これを解消するために、やや独断的な方法をとることから増加するともいえる。参考として初期分裂病群の 4% 値を示した。

BRS から、LA-G が MA-G に比して高く、適応レベルでも、LA-G が高いことが示されている。

RSS は N-G, MA-G, LA-G のいずれも正值であり、やはり MA-G < LA-G である。LA-G は、

4% において MA-G より高い値を示すが、 $R+\%$ ($F+\%-2$), P, BRS で優位にあり、結局 RSS でも MA-G を凌駕する値を示した。

片口⁽²⁰⁾によれば、神経症者の RSS の平均は +15.23 であり、極めて本報告に類似する。なお正常者は平均 +42.47 であるとしているが、本報告の N-G の平均値は、これよりもやや低くなっている。

IV. 資料の整理と解釈 (2)

以上、主として不安顕在群と、不安潜在群とを対比させつつ資料を通観したが、従来より不安の指標として、陰影反応、At 反応が強調されすぎていたと思われる。

本資料からも、陰影反応、At 反応等と、顕在化した不安との関連は確められたが、細かい点ではなお問題を有しているといえる。一方、不安はすべての神経症者に存在すると考えられるが、その不安を如何に処理するかが問題なのであり、その処理の方法、すなわち防衛の方法が、ときには正常者と神経症者の、ときには神経症者のうちの不安を直接的に訴えるものと、不安を何等かの形で転換するものとに分けるといえる^{(1) (8) (9) (13) (15) (23) (28) (29) (33) (43) (50)}。

ロールシャッハテストにおける運動反応は、他の形態反応、色彩反応、陰影反応等とは異り、そのもつ形、色、濃淡等からの直接的な反応ではなく、客観的には存在しない内容の反応である。プロットの属性に左右される表在性の情緒、思考の態度ではなく、「内部からの刺激」(Klopfer⁽²¹⁾)としての反応が運動反応として出現すると考えられる。したがって、運動反応が示すものは、より深層のものであり、衝動、葛藤、不安、防衛等の一連の精神力動を知る手がかりとして極めて有力、かつ有効なものと考えられる。

このような観点から、表 2 より運動反応に関する項目を抜粋し、再掲し表 6 とした。更に表 7 を作り、また表 8 を作成した。

MA-G に総運動反応数が少なく、特に M 反応の減少がめだつ。しかし、S-G, N-G, MA-G, LA-G に比し比較にならぬ程低い運動反応数であり、M に関しても極めて低い値をとるといえる (表 6)。

M に関しては 4 群間に有意差 ($P < 0.005$) があるが、FM には有意差があるとはいえない ($P > 0.1$)。なお、m に関しては前述の如く $P < 0.005$ で 4 群間に有意な差があるといえる。

表 7 のうち、T. D. とあるのは Total Determi-

nants の意であり、決定因に附加反応があるときは、これを0.5のウェイトづけを行ない総計したものである。

運動反応が総決定因にしめる割り合い、すなわち $M+FM+m/T$ 。D. は一応の差があるとはいえ、単純な平均値の和ほどその差が明確に出ない。これは大変興味深いことで、N-G, NR-G, S-G を通じて、ほぼ一定に保たれているともいえる。

したがって、M, FM, m の多寡は、この枠内の变化であるともいえる。この枠内の各運動因子の相互関係は表8に示した通りである。

表6, 表7, 表8を通して、FM は各群間に有意な差をもたない。表8でも明らかなように、運動因子内の FM のしめる割り合いは極めて類似しており、あまり変化をしない。これに比し、M の変化は常に各群間に有意であり、 $N-G > LA-G > MA-G > S-G$ となつている。LA-G の M に注目すると、表6, 表7では N-G と MA-G とのほぼ中間にあるが、表8では MA-G に近く、単純な M の数や、総反応数に対する比によつてのみ解釈を行なうことが正当であるといえないことが示されている。これは、Mばかりでなく、FM, m に関してもいえることである。

すなわち、FM についてみれば、単純な反応数の平均値からは $N-G > MA-G$ であり、総反応数との比でも同様であるが、運動因子内の比では、この関係がくずれ、 $MA-G > N-G > LA-G$ となつている。

また、m では表6, 表7から $LA-G > MA-G > N-G$ であるが、表8からは $MA-G \geq LA-G > N-G$ である。

FM, m を通じて、MA-G の FM が表6, 表7では減少をみせているにもかかわらず、実は総運動反応のうちの FM のしめる割り合いは増加している。m が表8にあるように、MA-G, LA-G を通じてほぼ一定であることから、ごく軽微ではあるが、MA-G の FM は、M の変化と相互に関係しているといえる。

m に関しては、更に後述するが、全体に FM がほぼ一定に保たれていることと、総運動反応の総決定因による比が、やはりほぼ一定に保たれていることから(表6, 表7)、M との強い相互作用を有していることが示唆される。

したがって、M と FM との関係が MA-G と LA-G との精神力動に微妙な差をもたらす、LA-G で多くの M を出現させるのは、これらと m との関係をまじえて、不安、葛藤、防衛のメカニズムを解

釈する上に重要な点となる。

Klopfer⁽²¹⁾ は、m 反応は「内部から来る、統合を脅かす力の存在の認知——同一人格内の異なる衝動の間の葛藤の存在とその認知」と考えた。Piotrowski^{(40) (41)} は「M, FM と異り、運動の源泉が外部にあり、個人の人格内に統合されていない原型的な生活役割の存在——自己の現実像と理想像との隔りの存在」と考えた。

これらは共に葛藤状況にあることを意味するもので、m が内的緊張と葛藤に関係することを述べているといえる。

片口⁽²⁰⁾ は統計的なデータはないと断わりながらも、攻撃性、積極性、衝動性との関連を m に指摘し、その種類をも考慮に入れるべきであると主張している。

現われた m 反応としての「爆発」、「発射」等と、「飛行機がおちる」、「波間にたどよう」といつたものは、その投影する内容が異なることは予想される。また、神経症的不安、緊張が、m 反応で示されるといつても、そこには何等かの内容的な変化がみられると思われる。

Piotrowski⁽⁴⁰⁾ は m 反応の内容分類を試み、これを assertive, compliant, indecisive の3群に分けた。津田⁽⁵³⁾ は、m と色彩に注目し、有色彩 m, 無色彩 m 等の8項目に分類した。Piotrowski は力と方向から、津田は色彩因子の関与から m を分類したが、ここでは(脚註1)、不安、緊張、葛藤の投影としての m を考え、次の5項目に分類した。

m の下位分類は、

- m₁: 対象から外へ出ていく運動、「爆発」、「燃焼」、「ふき出す」等、
- m₂: 力のぶつかりあい、干渉、「波がぶつかりあっている」、「渦を巻く」等、
- m₃: 不安定な浮遊状態、「ヨットが波に浮んでいる」、「海草がたどよう」等、
- m₄: 落下、流れる等、重力による作用「鳥が射られて落ちる」、「水がたれる」等、
- m₅: 受動的なもの、外からの力が加わった状態「開かれた」、「解剖された」、「蛙がつぶさ

脚註1: 著者は、教室の野沢、千大文理学部柳井らと共に、m について研究を続けてきたが、特に m の下位分類に関し検討をすすめてきた。その結果、上記5項目が m の下位分類として、現在のところ最も妥当であるという結論に達している。

れた」等、
である。

以上の下位分類にしたがつて、 m を各群間にわたり分類したのが、表 10 である。なお、参考のために m に関する資料を一括し、再掲したのが表 9 である。

表 10 のうち、各群の左行は実数を、右行は各群内の m 総数による比を表わしたものである。

表 10 では、N-G の m の下位分類 $m_1 \sim m_5$ 間には有意な差がなく、MA-G, LA-G, S-G はいずれも $P < 0.01$ (X^2 検定) で有意差がある。

更に、各群間について m の下位分類を比較すると、 m_1 では各群間に $P < 0.05$ で有意な差があり、 m_5 においては、 $P < 0.01$ で各群間に有意差がみられる。 m_2, m_3, m_4 は各群間には $P > 0.1$ で有意な差があるとはいえない。

これらのことから、まず、 $m_1 \sim m_5$ に分けた m の下位分類は一応の成功をみたといえよう。 m_2 に関しては、ややその発現が少いが、その意味あいには、「行き場のない力」であり、ある意味では、最も葛藤的であるといつてよい。

N-G では $m_1 \sim m_5$ にほぼ平均して分散し (m_2 を除く)、正常群のパーソナリティ統合上の力関係が平衡を保っていることを示唆しているが、MA-G では極端な m_5 傾向がみられることと、LA-G では m_1 と m_5 がほぼ同数で、この間に一見平衡がとれているかに見えつつも、相反する m_1, m_5 傾向の共存は両面的でありより深刻な葛藤を呼び起す可能性を秘めているといえよう。

V. 考 察

「不安なき神経症者はいない」とも、また、「不安は神経症の基本的現象であり、中心的問題である」(Freud⁽¹³⁾) ともいわれながら、ともすると顕在化した、表在性の不安のみが不安として問題化されやすい。

しかし、すでに述べたように、精神療法的接近により、治療開始当初に不安を訴えなかつた病者も、様々な治療的操作により、潜在した不安を顕在化することがしばしば経験される。したがって、不安を不安として体験し、不安の中に取り巻かれている神経症者と、不安を何等かの形で転換し、不安とは異なる症状や感情的体験として訴える神経症者との間には、不安を体験し、これを防衛する態度に差異があると考えられる。

今日までのロールシャッハテストによる不安の研究は、いわば表在性の、顕在化した不安を対象にしてきたものといえる。

Klopfer⁽²¹⁾ は free-floating anxiety と k, K との関係を述べ、情緒面での統合は、霧や雲等の K, k から、レントゲン写真等への反応に移行することから、知性化の機制が行なわれたことが知られると述べた。このように、陰影反応と不安の関係を強調したが、他因子との関連に対しては、あまり多くを語っていない。

Piotrowski⁽⁴⁰⁾ はロールシャッハテストを通して、「対人関係によつてもたらされた内的葛藤が、不安や病的恐怖を引き起す」といい、このような不安や病的恐怖が増大すると、 $\Sigma c'$ が増し、 $\Sigma c - \Sigma C$ の差が開き $\Sigma c > \Sigma C$ となると述べている。更に、 $\Sigma c'$ が増すことは、現実との争いが増大し、見えざる敵を想像しがちになること、そして、その敵意は他者へ向くより自己へ向きやすく、ために自身を減ぼす怖れが多くなる、と強調している。 Σc と不安の関係は、 $\Sigma c'$ と不安の関係ほど単純ではないとし、 $\Sigma c - \Sigma C$ の差の大小がすべての鍵を握るものであると考えた。また $\Sigma C > \Sigma c$ は、acting out の危険性があると指摘している。この Piotrowski の理論は、単に陰影反応が不安に関係するという、一義的な、ロールシャッハテスト的不安論から一步も二歩も前進しているところに意味がある。一方陰影反応とは別に、精神療法開始時と終了時におけるロールシャッハテストの比較から、 m は著明に減少したと、及び、 M の増加をみたことから、未統合の力 (m) が、統合された (M になつた) と解釈している。

しかし、Piotrowski もこの運動反応と陰影因子の関連、 H 反応との結びつき等には言及していない。

Eichler は不安の指標として 15 項目をあげてはいるが、その相互の関連については詳しく述べていない。しかし、ここに抽出された項目は、本報告においても、有意な差をもち得た項目に一致するものが多い。

一方、ロールシャッハテストにおける運動知覚は、他の形態、色彩、陰影等の知覚とは異り、プロットの属性による一次的なものではない。特にこの点がロールシャッハテスト研究者の興味をひくところとなり⁽⁴⁵⁾⁽⁵⁸⁾、運動反応の研究は枚挙にいとまがない程である。

Rorschach⁽⁴⁴⁾ 自身は、極めて厳格に運動反応を規定し、M 反応 (B 反応) しか認めなかつたが、Klopfer^{(21) (22)} は運動反応を3因子に分け、そのすべてが「内から来る刺激」の投影と考えた。この観点から Klopfer は、M は知能、想像力、内的安定性、受容性、共感性、自己概念等に関係することを見出し、極めてよく統合された、高度な水準にあることを見出した。FM は、直接満足を求める傾向、すなわち、人格の古い層に属する原型的なものを示すとし、m は、統制されない力の存在、すなわち、葛藤、緊張の存在を示すとした。

不安の問題は、この人格統合とは切り離せない問題であり、不安の問題の追求に当つては、ロールシャッハテスト上、更に運動反応との関連からも研究されるべきであると考えた。

平均値からの比較では、NR-G が、直接満足を求める、やや原型的、幼児的傾向があることがうかがわれ、仮説と一致する。同時に m は NR-G 全般に増加し、内的葛藤の存在、衝動的傾向の強化がうかがわれる。しかし、M、m に関し、MA-G と LA-G との間に有意な差を生じるのは何故であろうか。

単純な平均値の和からは、各群の運動反応の総和は S-G と離れているが、N-G と LA-G とは近く、MA-G は S-G に近い。これは、総決定因に対する総運動反応の比からいっても、意外にも MA-G と S-G が接近する。しかし、興味あることは、参考のために行なつた離人症群、境界例を含めて、この $M+FM+m/T.D.$ は 33% を中心とし $\pm 5\%$ の範囲にあり、ほぼ一定していることである。このことは、決して運動反応が個々に独立してあるのではなく、ある枠の中での変化であると考えられる。すなわち、被検者が、Klopfer のいう“内部からの刺激”を如何に受けとめ、人格統合へ如何なる努力を払っているかが、この因子間の相互作用、相互関係から知ることが出来ると考える。

常態心理の病態化過程での m の増加は、緊張感の増大、葛藤の深刻さ、不安の強さを示しているが、この m の増加は、FM 的、すなわち原型的、幼児的な基礎をもつた衝動、直接的な満足を得ようとする衝動に点火し、一層病態化への過程を進行させる。この病態化過程の顕在化は、やはり M 的な人格の統合性、自己確立の不充分さ、知的統合力、他者への共感度の低下をもたらし、かくして、M 的役割を次第に少ないものとしていくのである。

内部からの刺激の表現としての運動反応のうち、

FM は、本来的な衝動傾向の現われであり、人格のより原型的な層での違いでもある。このような基盤の上に葛藤が起り、その葛藤の深刻さが、常態心理の病態化を推進するともいえる。

更に神経症にあつても、FM 傾向の微妙な差が、M 傾向を左右し、不安を顕在化させるともいえる。

運動反応と陰影反応との関係を検索し、不安の顕在化への精神力動を更に検討する。

抑圧による緊張の増加は、より葛藤的な状況へ個人を押しやり、葛藤の認知による m の増加となるが、表 11 にあるように、 $k+K+c:FK+Fc$ は $N-G > LA-G > MA-G$ とその較差は小さくなり、知性化への努力により適応しようとする態度がみられる。

これは $F+\% - 2(R+\%)$ でもうかがい知ることが出来るが、この試みは $F+\%$ でも成功の裏づけがなされている。

対人関係の障害は (H) で表わされることが多い。対人関係における挫折感が (H) で示されるともいえ、この挫折感は、とりもなおさず m を増加させる。したがって、LA-G は、現実適応に極めて大きな努力を払いつつも、不適応感を内在させているといえよう。これは、防衛機制としては、抑圧、反動形成、あるいは知性化を行なっているといえ、自我機能を制限し、適応しようとしているといえる。

これに対し、MA-G では、内外の圧力により、直ちに人格の統合が脅やかされ、より葛藤的となり、不安に取り巻かれてしまっているといえる。

m の下位分類は Piotrowski が3種に分けたが、重力の方向に正か負か、力が平衡状態にあるか、干渉を起している状態にあるかで分けたものである。津田は非行少年を対象としたロールシャッハテストより、形態、色彩、濃淡と m の力の強さから、問診上得られた4性格類型との関連を調べた。その結果、「無彩色の強力反応や、形態、色彩を無視した運動反応は、より強い不満足感、緊張感の指標たり得るのではないか」としている。しかし、津田の分類では力の方向性が不明確になつている。そこで、著者ら (脚註1) は、m の解釈の基本にもどり、内的緊張と葛藤と、それによつて人格統合が脅やかされている状況を考え、運動の方向と力の強さから $m_1 \sim m_5$ の如くに m の下位分類を行なつた。

この結果、内部からあばかれる、他から押しこめられる、といった葛藤状況、受身の力の方向の中に MA-G が在ることが明らかとなり、葛藤状況にお

ける MA-G の受容的態度と依存性を示すものであり、容易に不安を露わしうることを示している。

また m_1 的拡散的、爆発的な力の方向と葛藤の強烈さは、LA-G にあつて、 m_5 的受身、受容的、依存的態度との併存により、両面的となり、葛藤状況をより深刻なものにしていると考えられる。

ロールシャッハテストによる人格像の解明と、常態心理の病態化への手がかりの検索は、ロールシャッハテスト状況をはじめとするすべての因子の解析によらなくてはならない。

テスト場面への同一化は、自我機能の柔軟性に負うところが多く、テスト表現の能力は、自己表現の能力でもある。

内的葛藤の大きさは、不安を顕在させる神経症者に劣らず、不安を潜在させる神経症者により大である。にもかかわらず、不安を潜在化させ、より適応的な状態にあることは、抑圧、反動形成、知性化等の防衛機制を働かせ、不安を潜在化することにより、かろうじて表面的、統合的、適応的レベルを保ち得ているのであり、防衛の破綻と退行とにより、自己表現の強さ、恒常性等に異常をきたし、不安が顕在化するといえる。

しかも、防衛の破綻と退行を起す危険性は、不安潜在群のもつ両面的傾向と、内的葛藤の深刻さにその起源があるともいえ、対人関係等における挫折感の増大により、容易により葛藤的な状況に陥るともいえる。

したがって、精神療法を行なうに当つて、その治療開始時に治療者はこの点に十分な考慮を払う必要がある。

VI. ま と め

不安の問題は臨床精神医学において常に重要な問題である。

著者は精神療法治療体験より、顕在性ないし表在性の不安のみが不安の中心的問題でなく、潜在化した不安が、諸種の症状発現に強い影響をもち、精神療法において、この潜在性不安の操作が必要であることを認めた。

不安の潜在化と顕在化をめぐる精神力動を解明するために、神経症者 72 例について、これを不安顕在群 (26 例) と不安潜在群 (46 例) に分け、更に正常群 28 例、精神分裂病群 39 例を対照とし、離人症群 18 例、境界例 20 例、及び初期分裂病群 8 例を参考として、ロールシャッハテストによる不安の研

究を行なつた。

主として統計的観察により、次の結果を得た。

1. 正常群、不安顕在群、不安潜在群、精神分裂病群の 4 群間には、R, Rej, M, m, k, K, FK, Fc, total H, (H) に統計的な有意差を認めた。

2. 他因子との関係から、 T/R_1 (non. color), T/R_1 (color card), W, D, Dd, S, F, FC, CF, A, At, Sex, Anal, Blood, Cloud, Smoke 等が 4 群間に差があることを見出した。

3. 4 群間には、 $\Sigma C: M, F: FK+Fc, FC: CF+C, F+\% - 2(R+\%), P, Shading\%, A\%, BRS, RSS$ 等に差があり、各群を特徴づける精神力動の相違が明らかとなつた。

4. 特に運動反応は、4 群症例の精神力動を明らかにするうえで重要であり、更に、不安顕在化と不安潜在化の精神力動の解明に重要であることを見出した。

5. 運動反応のうち、無生物運動反応 m は特にこの精神力動の解明に重要であり、 m をその向く方向と強さから 5 項目に分類し、次の結果を得た。すなわち、不安顕在群には受動的 m_5 が多く、不安潜在群には拡散的 m_1 と受動的 m_5 が両面的関係にあることを見出した。

6. 不安潜在群は、不安顕在群に比し、葛藤がより深刻であるといえる。すなわち、不安潜在群は不安を潜在化することにより、表面的、適応的レベルを保ち得ているが、その両面的傾向は、より大きな葛藤に自からを陥し入れる危険があり、不安定、不確実な適応から、さらに病態化する可能性が考えられる。したがって、精神療法を行なうに当つては、常にこの点に深く留意すべきであることを指摘した。

稿を終るにあたり、終始、御懇切な御指導と御校閲を賜りました松本胖教授に心から感謝の意を表します。

また、本学神経科心理室主任野沢栄司博士をはじめ、御鞭撻をいただきました心理室の諸兄に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) Arieti, S.: Interpretation of Schizophrenia. (加藤正明・河村高信・小坂英世訳：精神分裂病の心理，牧書店，1958)
- 2) 馬場礼子：自我心理学にもとづくロールシャッハ

- ッハテストの了解について, ロールシャッハ研究, 4, 155, 1961.
- 3) 馬場礼子: 境界例とその周辺領域—ロールシャッハテストによる精神力学的研究—, 精神分析研究, 11, 6, 2, 1965.
 - 4) Baruk, H.: Les Thérapeutiques Psychiatriques. (高橋宏・黒川正則・小木貞孝共訳: 精神病の治療, 白水社, 1956)
 - 5) Beck, S. J.: Rorschach's Test Vol 1, 2, 3, Grune & Stratton, 1944~1952.
 - 6) Bohm, E.: Lehrbuch der Rorschach-psychodiagnostik, Hans Huber, Bern, 1951.
 - 7) Brückner, P.: Konflikt und Konfliktschicksal: Eine Einführung in die Verlaufsanalyse von Rorschach-Protokollen, Hans Huber, Bern, 1963.
 - 8) 土居健郎: 精神療法と精神分析, 金子書房, 1963.
 - 9) 土居健郎: 精神分析と精神病理, 医学書院, 1965.
 - 10) Freud, S.: 自我論 (井村 恒郎訳), 日本教文社, 1960.
 - 11) Freud, S.: ヒステリーの研究 (懸田克躬訳), 日本教文社, 1960.
 - 12) Freud, S.: 精神分析入門, 上・下 (丸井清泰訳), 日本教文社, 1959.
 - 13) Freud, S.: 不安の問題 (井村恒郎・加藤正明訳), 日本教文社, 1960.
 - 14) Freud, S.: 精神分析療法 (古沢平作訳), 日本教文社, 1960.
 - 15) Freud, A.: 自我と防衛 (外林大作訳), 誠信書房, 1963.
 - 16) Filloux, J.: Le Tonus Mental. (村上仁訳: 精神力とは何か, 白水社, 1958).
 - 17) Fromm-Reichmann, F.: Principles of Intensive Psychotherapy. (阪本健二訳: 積極的心理療法—その理論と技法—, 誠信書房, 1964).
 - 18) 井村恒郎監修: 臨床心理検査法, 医学書院, 1963).
 - 19) 笠原 嘉: 精神分裂病者の不安について, 精神分析研究, 10, 5, 22, 1964.
 - 20) 片口安史: ロールシャッハ・テスト 心理診断法詳説, 牧書店, 1962.
 - 21) Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., Holt, R. R.: Developments in the Rorschach Technique, Vol. 1, 2. World Book Co. 1954.
 - 22) Klopfer, B. & Kelley, D. M.: The Rorschach Technique. World Book Co. 1946.
 - 23) Knight, R., Friedman, C.: Psychoanalytic Psychiatry and Psychology Clinical and Theoretical Papers, International University Press Inc., 1954.
 - 24) Kubie, S. L.: Practical and Theoretical Aspects of Psychoanalysis, International University Press, 1950. (土居健郎訳: 精神分析への手引, 日本教文社, 1952).
 - 25) 栗原喬一: 精神分裂病の病的過程における Rorschach Test 研究, 神経質, Vol 1, 1, 9, 1960.
 - 26) Lagache, D.: Psychoanalyse. (荻野恒一・大橋博司・木村定共訳: 精神分析の理論と実際, 白水社, 1961).
 - 27) 松本 胖: 神経症とその境界領域, 金原出版, 1964.
 - 28) May, R.: Meaning of Anxiety, The Ronald Press Co. 1950. (小野泰博訳: 不安の人間学, 誠信書房, 1963).
 - 29) Mears, A.: The Managements of the Anxious Patient, W. B. Saunders Co., 1963.
 - 30) 三浦岱栄監修: 精神療法の理論と実際, 医学書院, 1964.
 - 31) Menninger, K.: Theory of Psychoanalytic Technique, Basic Book Inc., 1959. (小此木啓吾・岩崎徹也訳: 精神分析技法論, 岩崎書店 1965)
 - 32) 村上英治・植元行男・秋谷たつ子: ロールシャッハテストにおける不安の研究 I—感情カテゴリーについて—, ロールシャッハ研究 1, 76, 1958.
 - 33) Noyes, P. A.: Modern Clinical Psychiatry, 3rd. Ed. W. B. Saunders Co., 1949.
 - 34) 野沢栄司: 社会適応過程における離人感と Self-definition をめぐる葛藤, 精神分析研究, 10, 4, 17, 1963.
 - 35) 野沢栄司: 離人症の精神療法的研究, 千葉医学会誌, 40, 1/2, 106, 1964.
 - 36) 小川暢也: 臨床における不安—精神生理学的アプローチ—, 精神分析研究, 10, 5, 12, 1964.
 - 37) 小此木啓吾・馬場礼子: ロールシャッハ・テ

- ストの精神分析学的研究（その二）—強迫的防衛機制の研究「第一報」一，精神分析研究，6，3，8，1959.
- 38) 小此木啓吾：臨床における不安—精神療法的接近から—，精神分析研究，10，5，17，1964.
- 39) 小此木啓吾：精神分析ノート，日本教文社，1964.
- 40) Piotrowski, Z. A.: Perceptanalysis, Macmillan Co. 1957.
- 41) Piotrowski, Z. A.: The Movement Score, Rorschach Psychology (Edited by M. A. Richers-Ovsiankina). Wiley, 1961.
- 42) Rapaport, D.: Diagnostic Psychological Testing: The Theory, Statistical Evaluation, and A Battery of Tests, Vol. 1, 2. Waverly Press Inc. 1946.
- 43) Rickles, N. K.: Management of Anxiety for the General Practitioner. Charles C. Thomas, 1963.
- 44) Rorschach, H.: Psychodiagnostik, Hans Huber, 1921. (東京，ロールシャッハ研究会訳：精神診断学，牧書店，1958).
- 45) 阪 武彦：ロールシャッハテストにおける m 反応についての研究，ロールシャッハ研究，5，87，1962.
- 46) 桜井図南男：神経症の不安，精神医学 最近の進歩，医歯薬出版，1957.
- 47) 佐竹隆三：ロールシャッハ・テスト，異常心理学講座第 2 巻，みすず書房，1958.
- 48) 佐藤尚信：ロールシャッハテストによる精神分裂病寛解状態の研究—特に緊張型を中心として—，千葉医会誌，38，3/4，244，1962.
- 49) Schafer, R.: Psychoanalytic Interpretation in Rorschach Testing; Theory and Application. Grune & Stratton, N. Y. 1954.
- 50) Stein, M., Vidich, A. J., White, D. M.: Identity and Anxiety Survival of the Person in Mass Society, The Free Press of Glencoe, 1960.
- 51) Sullivan, H. S.: Conception of Modern Psychiatry. Norton, 1953.
- 52) 高橋 進・小此木啓吾・木村 礼子：ロールシャッハ・テストの精神分析学的研究（その一），精神分析研究，5，1，14，1958.
- 53) 津田通夫：m 反応についての一考察—非行少年を対象として—，ロールシャッハ研究，6，98，1963.
- 54) 辻 悟・藤井久和：ロールシャッハ・テストのコンテンツ・アナリシスに関する研究—1—ロールシャッハ研究，1，32，1958.
- 55) 辻 悟・藤井久和：ロールシャッハ・テストのコンテンツ・アナリシスに関する研究—動物反応について—，ロールシャッハ研究，2，143，1959.
- 56) 辻 悟・藤井久和・大海作夫・恵美周子：ロールシャッハ・テストの間隙反応について，ロールシャッハ研究，1，21，1958.
- 57) 辻 悟・阪本昭三・清水将之・大野周子・金子 仁郎：離人神経症の研究（第 2 報）—ロールシャッハ・テスト所見の解釈を中心として—，精神分析研究，10，4，10，1963.
- 58) 富田 正利・内山 祥子：ロールシャッハ検査における運動反応の実験的研究，1，68，1958.